

性寮)「生活寮うみ(女性寮)」を、それぞれ7名定員で立ち上げました。法人ではそれまで、通所を中心に事業を展開していきましたが、支援をたくさん必要とする障害のある人たちも、家族支援から社会が支えるしくみが必要、だとの思いで、暮らしの分野の事業にとりくみました。あれから15年が経ち、グループホームも2ユニット(7名定員)増え、障害のある利用者の方々も28名となりました。当初の利用者も親も年齢を重ね、利用日数や支援の内容も変わってきました。とくに医療的ケアの必要な支援にも対応できるようスタッフとともにとりくんでいます。

●一番の楽しみは食事

渡辺さんは1976年生まれの43歳の男性で、グループホームに入った時は28歳です。障害は、脳性麻痺による四肢体幹機能障害です。寝たきりで緊張が強い方です。渡辺さんの要求は、現場のスタッフは彼の表情でくみ取っていますが、両親からも教えてもらっています。彼の一番の楽しみは食

べることです。そこで、食材を樂しむために口から食べることを大切にしてみました。ハンバーグやプリンが大好きです。

全面介助なので渡辺さんの口を開けるタイミングを見て介助しています。また、誤嚥をさけるよう普通食を少し柔らかくした食事を提供することを親とも相談してとりくんできました。また、鼻からの痰の吸引を親からの依頼を受け実施してきました。

そんな中、2013年37歳の時に加齢に伴う身体変化のため、1カ月近い入院をしました。手術は成功でこれまでのグループホームの生活を続けていけることとなりました。その際の病院食はすべてミキサー食でしたが、おいしく食べている渡辺さんの姿を見て、両親も普通食へのこだわりを柔軟に考えてくれるようになりました。こうした経過を踏まえグループホームでも渡辺さんの食形態をミキサー食に切り替えました。

●訪問看護の制度を利用して

日中は同じ法人内の生活介護事

業所である「のぞみの家」に通い、グループホームで暮らす生活の中、2016年くらいから微熱をくり返すようになりました。病院での検査の結果、渡辺さんは誤嚥性の肺炎をくり返していたようです。

胃ろう手術の必要性を感じ、食事を口から摂取していくことは、危険ではないかと考えていました。

しかし、日ごろから毎日のようにグループホームに顔を出してくれていた両親からは、渡辺さんの唯一の楽しみである食事を大切にしたいという要望もあり、現場では相当悩んでいました。利用者生活に大きな影響を及ぼす判断は、グループホームのスタッフは経験がなく、組織的な行動がとれないでいました。

法人としても訪問看護の制度を利用して、渡辺さんのケアとスタッフへのアドバイスを実施する提案を行なうのみでした。

●渡辺さんを中心にごまかまな関係者が集う

2017年になり、職員面接のなかで、渡辺さんの支援について

聞いたところ、職員からは「まだがんばれます」との返事でした。詳しく聞くと食事の介助では渡辺さんもしっかり口を開けてくれてスムーズに食事ができている報告でしたが、渡辺さんが熱を出した時の対応を聞いて、大変さを実感しました。熱が出た時は水分補給をしなければなりません。しかし、渡辺さんは緊張が強く手足を突っ張ってしまう状態で、水分を補給するのです。あるスタッフは、一晩中抱きかかえて水分補給をしている話をしていました。

このままでは渡辺さんも大変です。またスタッフも疲弊してしまうため、専門家の意見を聞くことにしました。

隣の小平市にある「地域ケアさぽーと研究所」は医療的ケアを必要とする重症心身障害児・者の豊かな地域生活を支援している事業所です。そこでのとりくみや医療的ケアを必要とする人たちの暮らしを両親やスタッフと一緒に教えてもらいました。

医療的ケアを必要としている人が増えていること、東京都が主

